

師・友・書物の七十年

柳 沢 英 蔵

I 少年時代

「日本少年」,「中学世界」 小学五年生のとき、村内の新聞店が「日本少年」という月刊誌の購読を勧めに来た。ひどくせがんだ記憶はないが、母は思案した挙句決めてくれた。三津木春影の探偵物が連載されていて、「湖底の潜水艇」というのが面白かった。有本芳水の詩文に引きつけられた。口絵には川端龍子の作品が出た。これで自発的読書の習慣がつけられた。

そのうちに、兄の読んだ「中学世界」を拾い読みするようになり、「夏のファンタジア」を繰り返して読んだ。すずかけ次郎というのは恒藤恭氏のペンネームで、一高生徒の時の余技だったのだ。兄の師範学校の教科書（日本史、西洋史、東洋史、動物、植物、農業、物理、化学）を手当たり次第に読み、読むにつれて理解が進んだようだ。

戸倉村立図書館 小学校の一室だった。児童用図書を揃えるということは当時はまだなかったのだろう。碧瑠璃園（渡辺霞亭）のもの、村上浪六のものなど随分と読んだ。「海のロマンス」（米窪太刀雄）も読み、「里見八犬伝」の大冊は当然筋をたどるだけの飛ばし読みだった。在庫図書のかなりの部分をそんな具合に読むことが長野商業卒業まで続いた。上級校進学に苦しむことなく、気の向くままに読書できたことは、ほんとうに幸福だったと思う。勿論、農事の忙しい時は、桑を背負子で家に運んだり、麦の収穫、秋蚕の桑摘、稲刈など、父母兄弟の手伝をした。

米倉磐一郎先生 高小二年の時、長野師範で兄と同級だった先生が新卒として着任されて、暫く家の座敷に滞在された。英語が得意ということで、長野商業本科一年編入の試験のための英語の指導

をお願いすることになった。この便宜がなければ、農蚕学校へ進んだかもしれず、自分の一生は別の道を辿っただろう。全くの手ほどきから、プライマリーという読本巻一、スタンダードの巻一、それぞれの巻二を2冊、つまり、1年間に4冊の読本を教えていただいた。秋の頃は、「英和中辞典」（井上十吉）を引いて予習するようになった。毎日放課後には図書室に行って、先生の来られるのを待ち、1時間ぐらいつ教わった。職員会議などでご都合が悪いときは中止した。日曜にも、1.5キロ離れた寺の先生の下宿なさっている所に押しかけた。先生が留守で、空しく帰宅することも度々だった。青年教師として、大いに勉強しようと張り切っておいでの先生には、ずいぶんご迷惑だったと思われ、恐縮に感じている。後年、英語の大学教授の手ほどきをしたものだ、と親しい方に自慢げに話されたことがあったという。先生は不言実行型で、決して嘘は言わず、不確かな事も言わない方だった。英語の指導ばかりでなく、深い感化を受けた。頂戴した「ジャパントイムス少年号」の臨時増刊の「英語熟達法」という小冊子は繰返し読んだ。直読直解の大切なことも教えられた。花園兼定、岩堂保、森正俊などの名も覚えた。

長野商業学校 本科予科を合せて6学級の小さな学校で、良い英語の先生が揃っていた。教頭の渡辺信夫先生は高師出で、唯一人の英語専門だった。瀬尾、山本、羽田諸先生はそれぞれ特色があって、楽しく授業が受けられた。予習を怠らなかったせいだろう。校長の丸山弁三郎先生は、後年長野市長や代議士をなされるだけあって、太っ腹の偉丈夫だった。宣教師のカナダ人の先生が会話を教えてくれたが、自分は消極的で駄目だった。

古屋商店横浜支店 長野商業を卒業してこの店に入ったのは大正九年春だった。第一次世界大戦

後の好景気で、三菱銀行とか高田商会へも行けたのだが、シアトルの本店へ行けるといのが魅力で、この個人商店に入った。仕入部という、在米日本人向の輸出を扱う倉庫で働いた。緑茶を小袋に詰める、干した芋茎を木箱に詰める、荷車を引いて通関手続をする、というような毎日だった。早く事務職に移って背広を着るようになりたいなどと考えず、支店長の目につくように、表裏ある勤めぶりをする者を嫌って、倉庫で仲間と働くほうが気楽でよいと私は考えていた。独身者20名ぐらいが、無駄遊びをしないようにということか、アメリカ人経営の英語夜学校へ揃ってゆくことになった。面接テストを受けたら、上級に選抜された。ひどく難しいテキスト数種を買わされたが、間もなく次々に退学してしまった。昼間の仕事で疲れてしまったのである。

斎藤秀三郎先生 世界的不況となり、渡米の見込がなくなったので、退店して帰郷した。大正十年の暮である。翌年四月上京、正則英語学校で勉強し、英語の教員になろうというのである。松田福松、牛山充、大津正、後藤一郎、清水起正の諸先生だった。校主の斎藤秀三郎先生は人力車で出勤し、いつもフロックコートを着ておられ、ベルが鳴るとすぐ教壇に現れ、すぐに授業を始め、終りのベルですぐやめて出て行かれた。休憩時間には大きい辞書を開いている先生の姿が見えた。大きな黒板の左上隅から、むしろ小さい字で例文を書き始め、黒板の右半分に移ると、袴をつけた書生の青年が左半分を消す。先生は、青年が冷水コップに注ぐと飲み、また注ぐと飲み、冬でも汗を流し、額から湯気を立てる。先生の見幕に圧倒されて、質問どころではないが、田舎から出て来たばかりの者には勇敢なのが居て質問することがある。くだらない事を尋ねると、先生は何も言わず睨みつける、おもしろい質問とお考えになると、にっこりされて、くわしく説明をしてくださる。English Idiomology を世界に問おうとしている大英語学者と田舎出の少年との取合せは、今思えば、すこし滑稽で、やはり大正年間らしい風景である。Higher English Lessons の第1巻がテキストだったような気がするが、あとの2巻は独習した。言語には型があり、型を通して理解と表現をする

ものだということがよくわかった。私の英語の実力の骨肉となったのだが、一時、生意気にも、資料には錦繡と襪袢が混在していると考えて軽んじたことがあった。先生の「英和中辞典」は最も愛用した辞書で、いつも手許から離さない。「和英大辞典」も特色ある辞書で、得意満面で講義をなさるご様子が眼前に浮かんで来るような内容である。

磯辺弥一郎先生、高橋五郎先生 正則英語学校と同じ町内に国民英学会があり、そちらのほうの授業も受けたことがあった。磯辺先生はその校長だった。温厚篤実な学者というタイプで、小さい教室で、声低く諄々と説くという風の講義だった。大きい教場で、奔馬のように授業を進める斎藤先生とは明らかな対照であった。C. O. D. を教室まで抱えて来られ、ちょっとした疑問でもすぐに引いて説明なさった。はっきり断定することはあまりなく、この点でも、斎藤先生の明快な口調とは違っていた。

高橋五郎先生がカーライルの「衣裳哲学」の抜粋を講じられていた。個人教授をしてくださるので、麻布のお宅へ毎週参上してステイヴンソンの短篇の訳読を教えていただいた。この高名で篤学の先生の家計が大変らしく思われたが、Chambers's Twentieth Century Dictionary——あまり正確な記憶ではないが——の欄外余白に微細な文字でぎっしり書込みがあるのを見てびっくりした。当時、英文学叢書が研究社から刊行され始めていて、市河三喜氏が The Private Papers of Henry Ryecroft (George Gissing) の註をつけていることが話題となり、あんな裕福の家のお坊ちゃんに、あの作の真髓がわかって堪るかと厳しい調子で言われるのを聞いて言葉がなかった。また官学の教授たちが N. E. D. を利用すれば、論争のとき勝つのは当然と僻みっぽく言われて、さびしい思いがした。

The Adventures of Sherlock Holmes 大正十二年の春、全く見込がなかったが、文検を受験してみた。不合格のショックから立ち直るために帰郷した。毎日朝食が済むと千曲川を渡って温泉場へ行き、公衆浴場にゆっくり浸るという生活だった。

自分では平気だったが、父母は村人に対し忸怩たるものがあっただろう。勉強は午後から夜にかけてだった。これは帰郷の際に買って来た2冊の原書の一つで、注釈のない英書を独りで読むのは初めてだった。その時の気負いは、思い出しても胸の躍る体験だった。Sir Conan Doyleの文体は明快で、筋が理詰めで、独りで読む第一冊目として最も適当なものだろう。初めて読むとき理解できない所は鉛筆で印をつけておいたが、二度目に読み直すとかかなりわかって来て嬉しかった。あとの1冊は*The Patrician* (John Galsworthy)で、この方は難解だった。英文の難しさばかりでなく、英国社会その伝統や文化の知識が不足だった。しかし理解し得る所々には魅せられた。九月には関東大震災が勃発し、当分上京は不可能となった。自分としてはむしろ腰を落ちつけて勉強できたと思っている。

II 中学・高校教諭時代

師範学校中学校高等女学校教員検定試験、略称文検 約半年在郷静養して独り勉強したのだから健康にとっても、実力養成のためにも、有効だったと思う。十一月長野市に文検予備試験があり、早朝の列車で出掛けた。予備試験は各県で施行された。長野県では10人ぐらいが受験したが、すべて私より年長らしかった。大晦日の夕方、文部省から予備試験合格という簡単な通知が来た。合格は、県内では私だけだった。本試験は一月文部省で行われたのだが、散々の出来だった。予備試験の合格は次回まで有効なので、五月の本試験を受けた。

書取はパーマー氏の分担で、短文20ぐらいだった。口頭試問の第一室は、岡倉由三郎先生と市河三喜先生で、短い文章を読んで概略の内容を言えというのであった。両先生のこわい顔が目に見え。第二室ではブランデン先生と会話をし、岡田美津先生が黙って観察して採点された。ブランデン先生は30歳ぐらいで、東京帝大に招聘されて英文学を講じておられたのだが、微笑を絶やさず、ゆっくりとわかり易く話しかけてくださった。こちらは言いまちがえて、しまったと思い、どぎまぎしているのに、'Well?'とか'Good!'とか言って励ま

してくださった。このときの感謝の気持は、後年生徒に対する自分の謙抑の態度を、聊かながら、促したと思う。のちに、英国一流の文人として桂冠詩人に擬せられたブランデン氏と問答を交すことができたことは、一生の思い出となった。

Mr. & Mrs. W. J. Whitehouse これより先、大正十三年四月一日に長野県松本中学校教諭心得を命じられた。文検予備試験合格という資格だけで、天下の名門松本中学（現松本深志高校）に就職できたのは、その頃全国的に中等学校の増設があった、各科の教員が不足だったからであるが、ずいぶんの幸運だった。尤も、五月の本試験に上京したとき、宿に突然福井中学校長が見えた。有名な大島先生で、来任を求められた。当時同校には斎藤静氏を主任として英語科には研究熱心の俊秀が集まっていた。その仲間になれば一廉の研究者となったかもしれない。

ホワイトハウス先生は旧制松本高校で教えていた英国人で、当時30歳にもならなかった。奥さんは2年ぐらい前に来朝したばかりで、25歳ぐらいだった。本試験の会話に対する準備として、毎週2回奥さんからレッスンを受けることにした。日本語も日本の事情も全く知らない奥さんと英語だけで話すことは、申し分ない会話の練習だった。外国語教授法など知らないことが却ってよかったと思う。ブランデン先生と曲りなりにも会話をし、文としては欠陥だらけでも、自然の話しぶりを示すことができたと考えるのだが、それは奥さんとの暗中模索の会話の中で自然に会得したことだと思う。片言の英語で、私の心持まで理解してくれる奥さんの、理解力というか感受性というか、その心の働きに驚嘆した。

文検に合格してから、奥さんと会話の練習をする必要がなくなって、今度は先生と日本古典の英訳を勉強することになった。それまでは紹介もされず、挨拶もせず、つきの悪い感じでいたのだが、お世辞は言わなかったが、特に無愛想ではなく、英国紳士はこんなだろうと思われる重厚な人柄だった。

Wilfrid Jone Whitehouseという姓名だったが、奥さんは官舎の一階の廊下から階段の上に向かって、大声を張り上げて、'Joe!'と呼び、三人で三

時の tea (お八つ) を楽しんだ。紅茶だけでなく、手づくりのケーキが出た。いろいろの種類があり、名前の異なるのに興味があったが、みな忘れてしまった。女中——と言っても立派な家の出で、高女卒だったが——その人は食事は別で、一部屋をあてがわれていて、一緒にお茶を飲むということはなかったようで、私には不思議だった。紅茶には練乳が入り、その風味は、それ以後味わった紅茶とちがいが、私には懐しいものとなった。いつも角砂糖の数を尋ね、カップを空けるといつも、‘Another cup of tea?’ と尋ね、私はいつも、‘No thank you.’ と答えるのだった。強いることはなかった。三時より遅れて訪ねるときは、grape juice を大きいコップで出してくれた。今のジュースとはちがう風味だったと思う。

奥さんの姓名は、Lily Margaret Whitehouse だったが、先生は ‘Lily’ と呼んでいた。私と話すとき、奥さんは先生のことを ‘my husband’ と言うのに、先生は奥さんのことを Mrs. Whitehouse と言った。奥さんのほうが馴れ馴れしく扱ったということだろうか。従って私はいつも、‘your husband’ とか ‘your wife’ とか言わず、‘Mr. Whitehouse’ とか ‘Mrs. Whitehouse’ と言った。奥さんのお母さんが英国から来て同居するようになった。一緒に庭の雑草を抜きながら草花の話をしたが、日本の老婆と話すのと全く変わらなかった。奥さんは my mother と言い、先生は Mrs. Huxley と言った。のちには先生は文芸春秋などを読んでいたようだが、私には英語しか話さず、奥さんも日本語で買物ができるようになったが、私には英語しか話さなかった。

The Tale of the Lady Ochikubo 先生との英訳の勉強は、始め旧制高校の理科の国文教科書をやったが、長篇の纏ったものを取り上げることとなり、十世紀の落窪物語を始めた。先ず私が英訳してゆく。それを原文と照合しながら先生が英文を書き、奥さんがタイプする。それを私が原文と照合し、添削して持参し、先生と吟味する、先生が最終稿をつくり、奥さんがタイプしたのである。奥さんは、映画を見るようで、テンポが早くて面白いと言った。昭和九年に神戸の J. L. Thomson & Co とロンドンの Kegan Paul, Trench,

Trubner & Co から刊行された。日本では定価 5 円だった。先生は共著にと言ってくれたが、私の名は何の役にも立つまいとして断ったら、巻頭に次のように書いてくれた。I desire to express my great indebtedness to my colleague Mr. Eizo Yanagisawa for his invaluable assistance in translating this monogatari from the time when he first suggested its translation, W.W. Matsumoto, May 12 th, 1934. 当時 5 円というのは高価な本だった。

「落窪物語」の一節

十二月、山に雪いと高くふれる家に女眺めてゐたり。

雪ふかくつもりて後は山里にふりはへて来る
人のなきかな

御杖の、

八十坂を越えよときれる杖なればつきてをの
ぼれ位山にも

などなん有りける。

広くおもしろき池の鏡のやうなるに、龍頭、楽人ども、舟に乗りて遊びあたるは、いみじうおもしろし。上達部、殿上人は、居あまるまで多かり。右の大臣殿おはしたり。かづけ物なん数知らずいりける。

The picture for the Twelfth Month was of a lady admiring the view from the window of a house in the mountains in deep snow.

Since the snow fell thus

So deeply here, has no one

Been able to come

To pay us a visit here in

This mountain-village of ours.

To the walking-staff which was presented to the old Chūnagon on this occasion was attached this poem ——

We intend this staff

To help you in crossing your

Eightieth birthday,

And to help you to attain

Yet higher peaks of honour.

It was very delightful to see on the occasion of this birthday celebration two barges, with musicians on board, playing, as they floated on

the pleasant, spacious, calm, mirror-like lake. Courtiers of high rank and high officials came in great numbers. The Minister of the Right was present and made an unaccountable number of presents.

松本中学野球部長補佐 昭和五年から昭和十二年まで八年間、毎年三月下旬から七月一杯までは、放課後になるとグラウンドに出て、野球部の練習を見た。キャッチボールもできない自分なので、ただ見ていただけだったが、帰宅する頃はとっぶり暮れていて、その期間は家の机には蜘蛛が網をかける有様で、何の勉強もできなかった。しかし自分の人間形成にはひどく役に立った。

高等教員検定試験参考書 高等学校高等科教員検定試験、略称高検、というのは旧制高校教授の資格試験で、帝国大学卒業生のうち申請者だけが在学中の成績によって無試験で資格を認められていた。高等師範卒でも早稲田や慶応の卒業生でも無資格だった。毎年受験者のために参考書が発表された。年々すこしずつ変わった。昭和十年六月発表の試験科目と参考書を挙げる。試験科目 (イ) 英文和訳 (ロ) 和文英訳 (ハ) 英文学 (ニ) 英文法 (ホ) 英語音声学 (ヘ) 言語学概論 (ト) 会話及書取 参考書

Shakespeare : King Lear ; Hamlet ; Macbeth ; Midsummer Night's Dream ; The Merchant of Venice ; Othello. Milton : Paradise Lost, I - IV. Bunyan : The Pilgrim's Progress. Sterne : Sentimental Journey. Sheridan : The Rivals ; The School for Scandal. Poe : Tales. Hardy : The Return of the Native. Galsworthy : The Forsyte Saga. Palgrave : The Golden Treasury of Songs and Lyrics. Buchan : A History of English Literature. E. D. Jones : English Critical Essays (19th Century) (World's Classics, 206). P. M. Jones : English Critical Essays (20th Century) (World's Classics, 405). Nichol Smith : Shakespeare Criticism (World's Classics, 212). J. C. Squire : Selections from Modern Poets. Herbert Read : English Prose Style. Bloomfield : Language. Jespersen :

The Essentials of English Grammer. H. Brandley : The Making of English. Vendryes : Language. Curme : Syntax. Jones : An Outline of English Phonetics. Fuhrken : Standard English Speech. Diberius : England. Wells : A Short History of the World の類。「の類」を添えたのは、全部読まない者は受験するなというのではないことを示している。とにかく、いつかは受験しようと、以上の書は揃えようとした。1冊数百頁の本が多く、一通り読むのも大変で、内容を記憶することは至難だった。英文学だけは、英米人の試験官がしらべる為か英文で書くこととなっていたので、E. Gosse の *A Short History of Modern English Literature* と G. Saintsbury の *An Outline of English Literature* を読んだのだが、前者を朗読して、その堂々たるリズムの文体のとりこになった。これらの参考書を独習することは当時不満足のものだったが、シェークスピアやミルトンの偉大さを垣間見る機縁となったことは幸運だった。

英文日本百科事彙 昭和十三年四月諏訪中学、現諏訪清陵高校、に転じた。暫くしてホワイトハウス夫妻が東京に移った。国際文化振興会で編集刊行しようとしていたこの本の英文原稿の文体統一の仕事をするようになったのである。学者が分担で書いた原稿を何十人かの練達の者が英訳し、ホワイトハウス氏が添削して文体を統一したのである。先生の推挙で、自分も英訳を分担することになった。外務省の翻訳官とか高名な英文家などの英語は飾りが多すぎて困ると言い、君の英文のほうが良いと言って、真赤に直した原稿を見せてくれた。いわゆる有名人の裏を覗いた思いだった。

Joseph Conrad その頃、立派な英文が書けるようになりたいという願望を持っていた。ポーランド生れで、英国船で働いていただけで、特に英文の修練をしたこともなかったのに、英文で創作を書いたコンラッドの事績を知り、自分も可能性をためたいと思ったのである。今思えば、とんでもない思い上がりだった。最初読んだのが *The Arrow of Gold* で、明快な文体にも魅かれたが、Rita という女性の一筋縄では行かない性行が面

白くなり、英文修練の見本にという大望を忘れて、次に *The Rescue* を取り上げた。これにも Mrs. Travers という女主人公が居て男性に未練を懐かせる。それから *The Rover*, *Suspence* と耽読した。 *Youth* と *The Mirror of the Sea* の描写の美しさに感激した。

Thomas Hardy *The Return of the Native* の中の自然描写をすばらしいと思ひ、 *Tess of the D'Urbervilles* を読んで、作者と同じく世俗の慣習の不合理的を憤慨した。文学の研究というよりは流麗な文体に引きつけられたのである。R. L. Stevenson の *Dr. Jekyll and Mr. Hyde* や *Treasure Island* や *An Inland Voyage & Travels with a Donkey* など、また W. H. Hudson の *Green Mansions* や *A Shepherd's Life* や *Far Away and Long Ago* など、どれも注釈のない原書で読んだ。

Richard Jefferies だんだん自然観察に興味を覚え、この作家の凝った文章に魅かれて、 *The Open air* や *The Life of the Field* を愛読した。George Gissing の *The Private Papers of Henry Ryecroft* を愛読したのも、英国の田園を楽しむ主人公に同感したからである。ブランデン先生の *Mind's Eye* とか *The Face of England* とかに感激したのも同じ理由である。

Fifty-Two Nature Rambles 何よりも愛読したのはこの本で、52章に分けて南英の田園を観察散策に甥を伴れ出して説明する仕組になっている。毎週1章ずつ読むことを20年も続けている。*Wayside and Woodland Blossoms (Series I & II)* と *Wayside and Woodland Trees (Edward Step)* により、さらに細かく英国の野草木を知ることができた。

Kruisinga: A Handbook of Present-day English 4 vols 一番よく読んだ文法書はこれだった。市河三喜氏の「英文法研究」によって、Nesfield を盲目的信仰することから脱却することができた。さらに Jespersen の *The Essentials of English Grammar* の勉強で英語を生き物として見るようになった。

Encyclopaedia Britannica 14版 24巻 *OED (Oxford English Dictionary)* 13巻 これらを特別の書棚を注文して列べて悦に入っていた。これらを個人で所有する中学教師は多くはなかったと思う。昭和三年暮に家庭を持ったのだが、日常生活は地味で、無駄づかいはせず、しかし学力増進に役立つと思う参考書はどんどん買った。妻は何も不平を言わなかった。松本中学という名門校で無事勤めてゆくためには仕方ないと諦めていたのだろう。生徒は初め難問をぶっつけたが、えらぶって出鱈目にごまかしたりせず、わからない事は調べて後で答える姿勢を続けた。外国雑誌の *Outlook* とか *Bookman* とか *Fortnightly Review* とか *Atlantc Monthly* などを年間予約で購読した。勿論十分に読んだわけではないが、刺戟としては役立ったと思う。

「露伴全集」(岩波) 12巻 大型の豪華版であったが、小説ばかりか、史伝や随筆や評論を愛読した。人生の指針を求めようと考えた。「苦境」「簡素治新」「快樂」など飽かず精読した。

高等教員検定試験 諏訪中学は進学校として好成绩だったが、教員は授業に専念すればよい、生徒自治会のことは構うな、というのが以前からの方針のようで、受験には好都合だった。自信があったわけではないが受験してみた。

試験場の文部省に近い赤坂の友人の店に厄介になった。十月中旬だったが、蚊に苦しめられてよく眠れず、心身不調だった。監督は試験官の大先生だったようだ。問題は次の通りである。

高等教員英語科検定試験問題

英語音声学(英文法、書取を通じて四時間)

1. Give historical reasons for the following phenomena in pronunciation:
 - (1) [k] is dropped in *knowledge*, while it is kept in *acknowledge*.
 - (2) *o* in *women* is pronounced [i].
 - (3) [w] and [h] are dropped in *Berwick* and *Durham*, while they are sounded in *door*.

way and war-horse.

- (4) *heart* is pronounced [hɑ:t], not [hə:t].
(5) *x* is voiceless in *exercise* and voiced in *exert*.
2. Explain briefly how the present inconsistency of English spelling has come about.
3. Give words that properly rhyme with the following, two for each :
- (1) truth (2) tolls (3) stranger
(4) cartoon (5) drought (6) host
(7) career (8) matured (9) fruition
(10) create (11) cleanse (12) refer
(13) pressed (14) benign (15) pleasure.
4. what are the general rules applicable to the use of the strong forms of prepositions?
5. Transcribe the following passage phonetically, marking word-and sentence-stress :

THE BULLET-PROOF JACKET

A man once called on the Duke of Wellington, and showed him a jacket which he had invented for soldiers, and which, he said, was bullet-proof. "Oh!" said the Duke, "just put it on!" Then he rang the bell, and said to the servant, "Tell the captain of the guard to order one of his men to load with ball-cartridge and come here."

The inventor of the bullet-proof jacket disappeared, and the Duke was never troubled with him again.

英文法 (英語音声学, 書取を通じて四時間)

1. Explain the origin of the Infinitive.
2. Explain the following words etymologically :
- (1) Thursday (2) Easter (3) December
(4) Japan (5) English (6) telephone
(7) admiration (8) automobile (9) soy
(10) picaresque (11) misanthropy (12) atonement
(13) centipede (14) Utopia (15) benevolent.
3. Explain the following, giving examples :
- (1) Attributive Noun (2) Group-Genitive (3) Object of Result
(4) Dative of Interest (5) Split Infinitive.
4. Discuss the following sentences with regard

to the use of case :

- (1) Let love be blamed for it, not she, nor I (Tennyson).
(2) Him I accuse the city ports by this hath enter'd (Shakespeare).
(3) 'Tis not thy wealth, but her that I esteeme (Marlowe).
(4) This same scull, sir, was Yorick's scull, the king's jester, —(Shakespeare).
5. Fill up the blanks with appropriate prepositions:
- (1) () no matter what risk, the thing must be accomplished quickly.
(2) See the invalid properly cared ().
(3) I have been () a great deal of trouble and expense () his account.
(4) The enemy sustained loss () loss.
(5) He is close () sixty years () age.
(6) I have many tasks () my hands.
(7) It is not () man to resist such appeals.
(8) The coat fits you () a nicety.
(9) This sort of thing cannot be put up ().
(10) I had no time to sit down () my dinner, and ate () snatches.
(11) I will employ him () way () experiment.
(12) He is quick () picking up languages.
(13) They were () daggers drawn () each other.
(14) He left the university without taking a degree, () the view () becoming an artist.

書 取

The works of the lesser writers of the seventeenth century show the rise of a new spirit, foreign to the times of Shakespeare,—a spirit of observation, of attention to detail, of stress laid upon matter of fact, of bold analysis of feelings and free argument upon institutions; the microscope of the men of the Restoration, as it were, laying bare the details of daily

objects and superseding the telescope of the Elizabethans that brought the heavens nearer earth. No one word will finally describe it: in its relation to knowledge it is the spirit of science, to literature it is the spirit of criticism; and science and criticism in England are the creations of the seventeenth century. The positive temper, as opposed to the mystic, is everywhere in the ascendant, in spite of the imaginative aberrations of the more extravagant religious and political theorists. In literature illustrations are many; thus satire, which in the age of Elizabeth was the pastime of very young men, who "railed on Lady Fortune in good terms," became deadly earnest after the Civil Wars, in the hands of men like Cleveland, Oldham, Marvell, Butler, and Dryden, who left Nature and Fortune with their withers unwrung, and aimed at the joints in the harness of their enemies. Thus imaginative works, the good, as well as the bad, were exposed to a running fire of burlesque and parody, and reputations were made on travesties of Homer and Virgil. Thus, too, the drama turned away from the broad treatment of human nature and the search for new emotional situations carried so far by Webster and Ford, to the humbler task of social portraiture and the mimicking of individual foibles.

英文学 (言語学概論を通じて四時間)

- (1) Candidates should write their number on each sheet.
- (2) Answers should be written in English.
- (3) Candidates should begin each answer on a separate sheet of paper.

1. Legouis says of English literature, "It has shown, perhaps, a greater capacity than any other literature for combining a love of concrete statement with a tendency to dream, a sense of reality with lyrical rapture. It is characterized by loving observation of Nature, by a talent for depicting strongly-marked character, and by a humour that is

the amused and sympathetic noting of the contradictions of human nature and the odd aspects of life." Illustrate this generalization.

2. Give, in twenty lines each, your appreciation of *any two* of the plays of Shakespeare.
3. "The eighteenth century was one of the great ages of the English *theatre*."

"Except for Goldsmith and Sheridan, the *drama* in this century was dead."

Adjudicate between these two statements, or attempt a reconciliation between them if you think that is possible.

4. Write a detailed appreciation of the poem that you admire most of those written in the twentieth century.
5. In what connection were *any five* of the following sentences used, and how characteristic were they of their authors?

- (1) Flee fro the prees, and dwelle with sothfastnesse.
- (2) A gentle Knight was pricking on the plaine.
- (3) Her lips suck forth my soul : see where it flies.
- (4) How beautiful mankind is! O brave new world!
- (5) Reading maketh a full man, and writing an exact man.
- (6) Except a corn of wheat fall into the ground and die, it abideth alone: but if it die, it bringeth forth much fruit.
- (7) Sonorous metal blowing martial sounds.
- (8) A mob of gentlemen who wrote with ease.
- (9) Oats, a grain which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people.

(10) By the soul

Only, the nations shall be great and free.

言語学概論 (英文学を通じて四時間)

1. Explain: (1) clipping, (2) litotes, (3) metonymy, (4) ornamental epithet, (5) *centum*-and

satem-languages.

2. Give the sources of the following borrowed words :

angel, bask, beef,
cinema, coffee, easel, negro,
opera, slogan, street, tea,
tobacco, tungsten, wine.

3. Give a brief history of the compilation of the "Oxford English Dictionary."

和文英訳 (英文解釈を通じて四時間)

5. 若かった時分、知合ひの隠居の誰彼が、老眼鏡を掛けて、きざみ煙草を吸ひながら、一枚の新聞を丹念に読んで、鷓呑みにした新聞記事を根拠に、家族や隣人に向つて、政治、外交、軍事その他について感想を洩らすのをたびたび見たことがあつたが、私も老いて、あの人達のやうになつたのかと感慨に耽ることもある。

6. 芭蕉がある夜許六の家へ行く途中、彦根附近の野原で、追剥に脅かされて、布子を脱いで、それに与へた。然るに後日その追剥が彦根の少年を通じて、その衣服を芭蕉に返して来た。少年の話に、その賊は犬神五郎といふ大賊だが、あの野原で芭蕉を一討にして有金を奪はうとしてついて来たが、どうしても討つ機会が得られなかつた、さういふえらい人から物を奪つたのは相済まぬ、と言つて衣服を返して来たのだといふのである。作り話の虞もあるが、芭蕉のどこかにさういふ所があつたのだらう。

英文解釈 (和文英訳を通じて四時間)

1. *Paraphrase the following sonnet :*

Let me not to the marriage of true minds
Admit impediments. Love is not love
Which alters when it alteration finds,
Or bends with the remover to remove :
O, no ! it is an ever-fixed mark
That looks on tempests and is never shaken ;
It is the star to every wandering bark,
Whose worth's unknown, although his height
be taken.
Love's not Time's fool, though rosy lips and
cheeks
Within his bending sickle's compass come ;
Love alters not with his brief hours and

weeks,

But bears it out even to the edge of doom.
If this be error and upon me proved,
I never writ, nor no man ever loved.

2. *Paraphrase the following passage :*

It is a happy thing that there is no royal road to poetry. The world should know by this time that one cannot reach Panassus except by flying thither. Yet from time to time more men go up and either perish in its gullies fluttering excelsior flags or else come down again with full folios and blank countenances. Yet the old fallacy keeps its ground. Every age has its false alarms.

What is the theme of this passage ? Write it in your own plain English. And explain the meaning of the underlined phrases.

3. *Translate into Japanese :*

The conventional farm-folk of his imagination—personified by the pitiable dummy known as Hodge—were obliterated after a few day's residence. At close quarters no Hodge was to be seen.... The typical and unvarying Hodge ceased to exist. He had been disintegrated into a number of varied fellow-creatures—beings of many minds, beings infinite in difference ; some happy, many serene, a few depressed, one here and there bright even to genius, some stupid, others wanton, others austere ; some mutely Miltonic, some potentially Cromwellian ; into men who had private views of each other, as he had of his friends ; who could applaud or condemn each other, amuse or sadden themselves by the contemplation of each other's foibles or vices ; men every one of whom walked in his own individual way the road to dusty death.

Who is spoken of here ? Why is he now a boarder at a dairyman's ? Annotate the words underlined.

4. *Translate into Japanese :*

To any meditative Magian rover, this

serene Pacific, once beheld, must ever after be the sea of his adoption. It rolls the mid-most waters of the world, the Indian ocean and Atlantic being but its arms. The same wave wash the moles of the new-built Californian towns, but yesterday planted by the recentest race of men, and lave the faded but still gorgeous skirts of Asiatic lands, older than Abraham; while all between float milky-ways of coral isles, and low-lying, endless, unknown Archipelagoes, and impene-trable Japans. Thus this mysterious, divine Pacific zones the world's whole bulk about; makes all coasts one bay to it; seems the tide-beating heart of earth. Lifted by those eternal swells, you needs must own the seductive god, bowing your head to Pan.

Write notes on the words underlined.

口述試験

第一室

no man's land	chit
ukulele	golden mean
debunk	hydrophobia
Ido	red-tapism
ex-service	Vandalism
débutanté	Valhalla
musical chairs	earmark
jig-saw puzzle	presentation copy
Braille type	Aran Islands
best man	baroque
Big Ben	Romulus and Remus
biochemistry	Ossian
slimming	Thucydides
red-letter day	feminine rhyme
hermaphrodite	iambic tetrameter
abalone	ブロック
entasis	グロッキー
Eire	ジッパ
zeitgeist	ゲリラ
Nemesis	ヨット
Fleet Street	道教
Chinatown	孟子

who's who	論語
Baedeker	全体主義
buffer state	鉄カブト

第二室

- I. Renaissance 時代の Humanism, Humanities, Modern Humanities, Humanitarianism, New Humanism.
- II. Lyric poetry.
- III. 指定書中, 殊に Shakespeare について.
第三室 (豊田博士の分のみ)
1. (a) a greenhouse
(b) a green house
2. mankind
3. unintelligibility
4. dissolve
5. potentiometer
6. alternate
7. corps
8. conjure
9. excuse
10. desert
11. close

委員講評

本年度高等学校高等科英語科教員検定試験は十月十四日から十九日迄行はれた。始め三日間九時から一時まで筆答試験。第一日は九時から二時間半英文法及書取。一時間半音声学。第二日は二時間英文学, 二時間言語学概論。第三日二時間半英文解釈。十八日に第一次の合格発表があり, 76名 (この中12名欠席) 中31名だけ合格となつて, 十九日の口述試験を受けた。口述第一室は市河博士で約十五分。第二室が齋藤博士で, 約十五分。第三室は豊田博士と Pickering 氏, 各七・八分で計十五分位の割合。十九日夜口述試験の済んだ後 Pickering 氏を除く三検定委員に承つた御話を記すと大略下の様になる。

検定委員の談話

音声学の 1. は Jespersen の *Essentials* の始めの方にあるのだが, 今度始めてかういふ性質の題を出したせるか出来はよろしくなかつた。2. は指定参考書の Ripman にも説いてあり, 又英語教育叢書の中に市河博士の書かれたものにも

あるが、系統的に考へて居ない人がかなりあつた。3. は概してよく出来て居るが、中には、rhyme の意味が明瞭に解つてない人もあり、又 host と cost とを rhyme する様に考へて居る人もあつた。5. は sentence-stress を全然知らない人があつた。英文法の 2. は例へばグreek、ラテン等に基くものをその原語を精確に書く事を要求したのではないが、グreek、ラテンの区別の idea さへもない人も少数ではあるがあつた。4. は易しいのに割合出来がわるく、discuss す可き点を擱めない人もあつた。5. も易しい様だが中々出来ない。殊に、(5)の upon (or on), (7)の in (若し for ならば次が a man とある筈)、(8)の to, (10)の by snatches, (11)の by way of など困難の様であつた。

英文学の 1. は参考書の終りの方にある passage であるが、読んでなくとも、説明出来さうに思はれる。Illustrate とあるから作者や作品を挙げて説明すればよいのに paraphrase した人もあつた。5. は十題の中五つを選ぶのだから楽な筈だけれども、四題迄正確に答へた人が一番よかつた。

言語学概論の問題の中で、本当に言語学の題は 1. の(1)と(5)位のものである。2. では、言葉の source と物の source とを混同した人が沢山あり、negro をアフリカの言葉とし、slogan をロシア語とし、tungsten を蘭領印度の言葉とし、wine をフランス語とした人もあつた。tea の語源の明らかでない人もあつた。3. は Baugh の英語史にも研究社英語学辞典にも出てゐるが、答案の出来は概してよくなかつた。N. E. D. と同一なのか何うなのか不明瞭な人も見えた。全体として、英文で書かないでもよいものを英文で書いた為に、不明瞭になつたり、不足になつたり、間違つたりして、不利を招いた人もあつた。

和英文訳は中々困難で、5. の「隠居」だとか、「きざみ煙草」だとか、「感想を洩らす」とか困つた様である。「煙草を吸ひながら感想を洩らす」のか、「煙草を吸ひながら新聞を読む」のか、中々六ヶしかつた。中には色々なものを入れて長くしたのや、spelling の出来ないのもあつた。英文解釈では、訳した時には満点の様でも、註

釈となるといけない人があるが、之は、教室で質問を受けるとしどろもどろになる人であるまいかと思はれる。1. は Shakespeare の sonnet. 2. は Hopkins. 3. は Tess. 之は参考書で、読のである筈であるから、Angel Clare や Hodge などの説明も出来る筈である。some mutely Miltonic... は Gray の Elegy を響かせたものであり、the road to dusty death は Macbeth にある。4. は Mody Dick の一節。Abraham を人類の祖先だと書いたのが非常に多かつた。Archipelagoes と Japans とに就いて単数複数の区別を無視して居る人が多かつた。又、impenetrable を invulnerable と説明する人も多かつた。

書取は、英文法の時間中に三十分程割いて Pickering 氏が行つた。

口述第一室の市河博士の話題は、新聞雑誌等に散見する常識語で、片仮名のは英語の綴、道教以下は英語で何といふかを尋ねた。平均半分出来た様である。debunk と chit (hotel などの用語) とは一人も出来なかつた。田舎で勉強して居る人には ukulele とか débutanté などは不利らしい。遊戯の musical chairs は實際外国でやつた経験のある人が一人だけ出来た。biochemistry の bio- が何であるか中々解つてない人があつた。Eire が出来ない人が案外多かつた。slimming も不出来であつた。Baedeker を知らぬ人もあり、golden mean の mean が何であるか不明瞭な人もあつた。hydrophobia など、語源が色々な組み合わせられて出て来るので知つて居さうなものである。Romulus and Remus は「昨日日比谷で見て来ました」といふ人もあつた。第二室で斎藤博士がたづねた問題のうち、Humanism についてはそれと Renaissance との区別や Humanities の意味をあまりはつきりと答へなかつた人がかなりあつた。

第三室では、Pickering 氏の、英語を教へた経験は何うか、英語と英文学と主としてどちらに興味があるか、何んな本を読んだかとか尋ね、英語英文学に就いて問答をした。豊田博士は別掲の十一項目に基づいて、発音、stress の位置、或る語におけるその規則及び stress の位置や語尾の発音の差と意味との関係等を尋ねた。a

greenhouse と a green house の stress の相違。mankind で stress が後にある時と、前にある時。unintelligibility の primary stress の位置及びかゝる語尾の語の stress の規則。こんな様な事を尋ねた。-meter で終る語。dissolve の場合のやうに s が重なつて居て [z] に発音される例を挙げることに困つた人が多く、excuse は名詞と動詞とで語尾の清濁を異にするが stress は共に後にあるのに、名詞の時は stress が前にあるやうに思つてゐた人もあつた。

最後の close は形容詞の [klouz], 動詞の [klouz] は知つてゐても、名詞に用ひられる場合、意味によつて [klouz] と [klouz] と両方あることを知らない人が多かつた。

(文責在記者)

4 時間連続は身にこたえ、帰つても部屋に上がれない程の疲労だった。筆答試験に合格して、三日後に口答試験を受けた。第一室の市河先生の分は辛うじて半分ほど正答、第二室の斎藤先生の質問には殆んど答えられず、散々の出来だった。第三室ではまあまあの出来だったと思う。十一月下旬に14名の合格者が官報に発表された。その中に入って、自分もびっくりした。検定委員の先生方に挨拶をするでもなく、年賀状を差し上げるでもなく、情実には無頓着の私だった。

戦中戦後 昭和十六年四月松本中学に戻ることに。それからの5年間は最悪の時期で、新設医専に校舎を明け渡せという命令があつて大騒動が起つた。また敗戦直前に父母が続いて逝くという不運があつた。昭和二十年十一月ごろだったか、地域中等学校から教練用の小銃など全部が旧歩兵五十聯隊営庭に運ばれ、山のやうに積んで燃やされた。燃えつきる2時間ばかりチェース中尉という若いアメリカ将校と久しぶりに英語を話した。嬉しかった。Ochikubo を贈ったら、Henry James の *The Ambassadors* をくれた。難解で有名な傑作を海外進駐に持って来ていたことに舌を捲いた。一緒にくれたチョコレートは、甘味に飢えていた4人の子供たちを喜ばせた。その年の暮、校長が水戸高校(現茨城大学)教授に推挙したいがと言われたが、

戦後の物情騒然としている時で、赴任の勇気が湧かず、結局昭和二十一年四月屋代中学の教頭として拾われた、というのは医専紛争の後仕末の一つだったのである。翌二十二年に六・三・三制が発足して、戸倉町立戸倉中学校長とされた。自分には校長などは勤まらない、一人の英語の教師にすぎないと言っても駄目だった。戸倉町は生れ育つた所なのでいろいろの事があつたが、割愛する。英語の授業は全て引受け、また近隣の中学校英語担当者をまとめて、近い町のカナダ女性宣教師から英会話の指導を受ける世話をしたりした。校長の仕事は校長の経験のある教頭に任せた。

当時、信濃教育会と県教組は合体すべしという議論が起こり、賛否で小中学校の教員は大揺れだった。両者は、友情で結ばれていながら、同時に対立すべき二つの組織でありたい、というのが私の考え方だったが、誰も聞いてくれなかった。ある日、アメリカ軍政部の長野県担当の教育官 Miss Lee が突然ジープで乗りつけた。あいにくと言おうか、折よくであつたか、全生徒が大きな一室に集まって生徒会をしていた。通訳と二人をそこに案内して、挨拶をしてもらつた。廊下を歩きながら、毎朝始業前30分ずつ生徒の希望者を集めて英語の補習をしているなどと英語で伝えて、自分ではかなり楽しかつた。ホワイトハウス夫妻と十数年の交際によって、英米人との会話を楽しむ心構えが具わつていたということだろうか。リーさんは長野へ戻り県庁へ行き、教育部長か誰かに、戸倉中学校長の柳沢を重く用いたらどうかと提言したらしい。軍政部の提言は命令であつた。自分は当時何も知らず、あとで伝え聞いた話である。そのため翌年三月三十日の本庁視学として転出の内示があつたのを断るという悶着が起きたのである。埴科郡小中学校長会というのが、月に一、二回あり、視学が何かと上意下達の話をした。校長の大部分は長師出身で、畑ちがいの私が突飛な発言をして顰蹙を買つていたようだ。しかし視学も長老たちも、私が英語をしゃべつて、直接進駐軍と接触できるというので、いくらか煙たがつていたのかもしれない。フォックス大佐とかいう関東教育部の高級将校が来て、県内の有

力者が集められたとき、怪しいものではあったが英語で意見を述べたのは自分だけである。そのためか、戸倉中学校は周囲の校長たちの猜疑的となり、スパイ網に囲まれた孤島になり、力強い教員組織は困難となった。視学の指導に背いて、県外である日光へ修学旅行をしたことなどが響いたのかもしれない。自分は陸へ上がった河童の感を深めた。

昭和二十四年四月、視学の忠告もあり、自分でも白旗を掲げた恰好で、上田松尾高校教諭に転じた。しかしその年の十月、長野女専校長の佐藤先生から、翌年開校（名称内容変更）の長野県短大の講師就任の懇願があった。先生は松本中学から諏訪中学に招いてくださった方である。天にも登る気持で承諾申し上げたが、上田松尾高の都合がつかず、翌々年春まで勤め続けた。

III 大学の助教授・教授の時代

長野県短期大学 この学校における15年は、研究者として、最も充実した期間で、ほんとうに幸福な時期だった筈であるが、昭和二十五年四月助教授として就任してから四年目の暮に次女たつ子の逝去という不幸があった。敗戦後の食糧事情による腎不全のため昭和二十三年初頭発病以来、6年の闘病の甲斐なく亡くなった。妻はその間外出することなく看病を続けた。

さすが県立女子専門学校の後身で、万事整備が行き届いていて、文科英語専攻の定員は30名ぐらい、木造校舎の中で、腰掛けて声を張り上げることなく、英米文学作品を、十分予習して来た学生を相手にして、読むのは喜ばしいことだった。自分の感受性の不足を学生によって補ってもらうことが屢々だった。英語教授法とか英語音声学とかを、担当の関係で、勉強しないわけにはゆかず、結局自分の為になった。

「長野県指導要領（中学校）英語科編」昭和二十四年ごろ長野県指導要領審議会というものができて、私はその委員の一人にされた。各教科に分科会ができ、数名の委員がついた。青木誠四郎氏が新しいアメリカの教育理念について指

導してくれた。単元学習とはどういうものかなど辛うじて理解した。委員の多くは小中学校の優秀な校長や教員で、新教育に対する熱意に燃えていた。私はその方面の素養に乏しく、一人だけ場違いの感じていた。青木先生も英語のことはわからないと言って、指導が遠慮がちだった。C. C. Fries—*Teaching and Learning English as a Foreign Language*によって言語の本質や教育方法について目を開けてもらった。これに単元学習の考え方を取り入れて系統表を作ったりし、あとで文部省方面では注目してくれたそうだが、当時の中学の英語担当者のかんりの部分が所謂プロの研修を経ていなかったもので、現実ばなれと考えられて、敬遠されてしまったようである。中学・高校・大学の経験があると言うので、表面的には適任というわけだったようだ。菊判三百余頁にぎっしり詰めたものがとにかく県教委から昭和二十九年に刊行された。松峰隆三氏その他の厄介になった。

Some Features of American Pronunciation（長野県短大紀要4号、昭和27.3）アメリカの発音の特徴のうち、二つを取り上げて考察した。*The American Everyday Dictionary*の全巻から、bridle [braɪdəl] というように子音の前にəの音をはさむ諸種の現象と clarify [klæɪrə'faɪ] や Ceremony [sə'remɒni] というように第2アクセントを置くもの諸種を列挙した。Prof. Jonesは前者を外国人の犯す誤と指摘したものである。

Prof. Miller 昭和二十七年八月、アメリカ研究セミナーというのが東大にあり、文学のクラス15名の中に入れてもらい、ハーバード大学のミラー教授のゼミに約1カ月参加した。級長格は上智大の刈田教授、特別に東大の西川教授や津田塾大の高野フミ教授が参加した。レベルの高い研修で、あまりアメリカ文学に親しんでいなかった私には大変役に立った。

Notes on *The Grand Design*（長野県短大紀要5号、6号、昭和27, 12, 昭和28, 11）アメリカ現代の小説家 John Dos Passosの近刊の大冊

で、ニューディールや世界第二次大戦を扱ったものだが、一応その形態を考察した。

A Teaching Unit for the Reading of Hawthorne in Class (長野県短大紀要9号, 昭和30.3) 単元学習の考え方を、ホーソンの短篇 *The birthmark* などを教室で講読する場合に応用する試案である。受験英語流の記憶に重点を置く方法とは全く違ひ、すごく理想主義的な提言で、まず実験されそうにない案であった。

The Structure of the *Hamlet* and Ratliff's Personality, with Some Reference to the Japanese Haikai (長野県短大紀要11号, 昭和32.1) 昭和30年8月、アメリカのノーベル賞作家ウィリアム・フォークナーが日本に来るといふ新聞を見て、信じられなかった、まして長野に来て10日も滞在するという事は信じられなかった。しかし、現実にやって来て、街を大股に歩く姿を見たり、問答を交したりできたのだ。全国の大学からアメリカ文学の研究者50名ぐらゐを集めてゼミを開催したのだ。アメリカ国務省の肝煎だった。長野市付近に住み、英語を多少話す者が20人ほど集って、一宵会談をさせてもらった。次はその一齣である。

Q : Which one of your works do you advise us to read first, and which next?

F : Thank you, that was very good English. I'm ashamed when I hear the Japanese people speak my language, and I can't speak theirs. I would suggest—the title is *Intruder in the Dust*. I suggest that because that deals with the problem which is important not only in my country, but, I think important to all people.

この質問者は、私が県短大で教えた若いOLであったが、フォークナーは丁重に応待して顔にも声にも誠実さが溢れていた。この人柄に魅せられて、先ず *The Hamlet* を読んだ。この作品はフォークナーの小説技法の典型のような所がある。四篇から成っているが、それぞれが独立した短篇のような感じがする。フォークナーは長篇を書く能

力が乏しいという批評さえあるのだが、ばらばらの挿話を列べたように見えるが、作品の意図は一つの筋の通った物語を書くことでなく、アメリカ南部の農村に生きる者が持つその地理歴史に対する実感と同じ渾沌とした印象を読む者に伝えようとしている。

ばらばらの小説をつなぐ役目をしているのが Ratliff というミシンを売ったり、農具を周旋したりして、村から村へ廻る行商人である。噂を聞いたり話したりするのは極めて自然と考えられる。トマス・ハーディの *The Return of the Native* 中の Diggory Venn とよく似た性格を持っていると思う。どちらも女性に恋されることはないが、信用される不恰好な男である。この Ratliff が数珠をつないでいる糸なのである。善意に満ちた性格と小説の中の役割とが結び合って、渾沌を貫く一道の微光となっている。

フォークナーの小説の構造と日本の俳階の形態とに共通点があると気づいて、その考察を加えた。芭蕉の俳階理論を素人流に理解して、それぞれの句が独立していながら、前後と微妙に関連し、全篇を統括すると予想外の感慨がもたらされるのである。この考察はフォークナーのいろいろの小説の構造の理解と鑑賞に有効と考えた。

The Treatment of Nature in the Yoknapatawpha Novels (長野県短大紀要13号, 昭和33.12) フォークナーは郷里ミシシッピ州北部を舞台にして長短篇をたくさん書いた。昔のもの、今のもの、いろいろであるが、その舞台を The Yoknapatawpha County と名づけたのである。彼は日本に来て受けた一番強い印象は景色の美しさであると言っているし、彼ほど天候に喜びを示す作家はアメリカにないと言われ、自然描写の鮮やかさは彼の特徴の一つと言える。私が魅せられたのもその点が第一だった。作中の人物と背景の自然との関係を五つに分けて考察した。(1) sympathetic nature (2) juxtaposition for contrast (3) juxtaposition for emphasis and interpretation (4) the human female flesh as the center of nature (5) nature sketching for the expression of the author's philosophy. 付録として、主要7小説の中に出てくる動植物全部を表示した。

The Mary-Joseph Situation in William Faulkner's Novels (長野県短大紀要14号, 昭和34.10) フォークナーの *Light in August* の中で, Byron Bunch は, 他の男によって妊娠している Lena Grove がその男 Lucas Burch を捜すのに献身的に協力し苦勞する。また *Wild Palms* の中の 'Old Man' の中の背の高い囚人はミシシッピー河の洪水の中で己れの命を危くしつつ, 乳児を伴った女を助け, その後刑務所に戻る。フォークナー自身も, 数年間憧れていた二歳年上の女性が他の男と結婚して上海に行ってしまう, その後離婚し, 2児をつれて帰郷する, その人と結婚して幸福な家庭をつくっている。このような状況を聖母マリアとヨゼフとの関係であると考え, Mary-Joseph situation と名づけた。妊娠した女性の Doom に対する従順, 介抱する男性の犠牲的助力について考察した。

The Mary-Joseph Situation in the Trilogy of *The Hamlet, The Town, and The Mansion* (長野県短大紀要15号, 昭和36.1) 聖母マリアとヨゼフが当時の伝統的信仰と慣習に盲従せず, 受胎告知に敬虔に従ったことは, counter-conversion(正統を敢て離れて, 地獄に落ちて構わないと覚悟すること)の一種と考えた。これは妊娠・出産・育児という天与の使命を負っている女性には覚悟ができるが, 男性には困難であるとフォークナーは信じているようである。三部作の主人公は Eula Verner という女性であるが, 肉体美の権化で, 地域の道徳的慣習など無視している。彼女の夫 Flem Snopes はその物欲により, 弁護士 Gavin Stevens は社会的常識と道徳理念により, 大悟一番の踏切りができない。

Reibunsha's English Dictionary for High School 「学習英語辞典」長野市の令文社に頼まれて高校生用の英和辞典を編集した。松峰隆三氏が企画と資料選定をし, 多数の高校教師に原稿を依頼し, 私が全部の原稿を添削し, 記述の統一に当たった。1,314頁全部に目を通したのである。昭和三十七年三月刊行された。手前味噌を言わせてもらうならば, 英和双解になっているが, 英文の定義と日本

文の定義は相補うようになっていて, 例文はまた別の訳がついていて, それらを読み合わせると, その単語の意味がよくわかるようになっている。Semantics(語義学)の考え方の応用であるが, 忙しい生徒たちには凝り過ぎていたかもしれないが, プロの英語教師には感服する人もいた。例えば, fuel の説明は「① (*anything that can be burned to make a useful fire* 燃料) ② (*anything that keeps up or increases a feeling* 感情をあおるもの) — Her insults were fuel to his hatred. 彼女からの侮辱が彼の憎しみをいっそう燃え上がらせた」としてある。

付録中の「補充要語」25頁, 「英語の文型」27頁, 類別日常語 46頁などは教師の間で評判になったらしい。

The Subconscious Will Rebel — An Explanation of the Failure of *Pierre* (長野県短大紀要16号, 昭和37.3) 「白鯨」の作者ハーマン・メルヴィルは, その世界五大小説の一つを書いたあと, *Pierre* を書いたが, これは失敗作と考えられている。失敗の原因は, 当時のメルヴィルの精神の混乱であるとし, それは彼の意識と潜在意識との闘争, 清教徒の伝統と予言者の情熱との相剋, 母への愛着と父の思い出との軋轢, 母と妻に対する愛のもつれがもたらしたと考察し, 当時のアメリカ社会が *Moby Dick* という傑作を理解する力を欠いていたことに対する失望が苦悩を倍加したと考察した。

What Does a 'Literary Naturelist' Mean? — Nature in Literature (長野県短大紀要17号, 昭和38.2) アメリカの各地の山野を跋涉して, 動植物を観察し, 自然現象を説明する Edwin Way Teale は *North with the Spring* と *Autumn across America* と *Journey into Summer* という旅行記があるが, a literary naturalist という撞着表現の名で呼ばれている。文学と自然との関り合いの種々相を考察し, Richard Jefferies, W. H. Hudson, Gilbert White, Charles Darwin, R. L. Stevenson, Henry D. Thoreau, Edmund Blunden, George Gissing, Joseph Conrad, William Faulkner, Thomas Hardy, William

Shakespeare の作品に言及し、日本人の眼で読んだ印象を述べた。

‘Blinkerism’ in Language Learning (長野県短大紀要18号, 昭和39.1) 外国語に習熟するには、特に入門の頃には、耳と口を使って素直に真似ることが肝腎であるが、入門期の中ばから、なるべく早く辞書を使うようにし、幾つかの語義のうちから最適のものを選ぶ作業をさせるべきである。従来 translation (訳すということ) は古くて有害であると言う人々が少なくない。通訳養成の場合は別として、国民大多数を対象にする教育を考えると、辞書を利用して頭の鍛練をすることは軽視できない。フランスでラテン語という死語を必修とすることによって、論理的思考が養われると説いた前田陽一氏の考えを展開したものである。

淀川郁子女史と Miss Marie Forstel 長野県短大の同僚に淀川さんがいて、ジョージ・エリオット一筋に研究していた。義弟は工藤好美教授で、*Middlemarch* という大作その他共同で翻訳を果たされた。原作と照合してみると、一語一語選び抜かれて、弛みなく、見事な国語に移されている。世間に氾濫している粗悪な翻訳とは異質の出来である。女史の温雅な学究的姿勢から多大の感化を受けた。フォステルさんとは毎週一回の会話を楽しみ、いろいろと親切な教示を受けた。英語研究室には、ほかに間島定雄氏がいて、雰囲気は好学静穏で、今思っても懐しい。

What Did Faulkner Mean by ‘Honor’? (長野県短大紀要19号, 昭和40.4) フォークナーは1950年にノーベル賞を受けるときの挨拶の中で、honor は人類を永続させて来た大切な性質であるとしている。社会の道徳的慣習を守ることによって honor は授けられるという社会学の考え方と世間一般の定義を紹介し、*Wild Palms* 中の the convict, *The Unvanquished* の Bayard Sartoris, *As I Lay Dying* の the Bundrens, *The Mansion* の Mink Snopes, *Absalom, Absalom* の Thomas Sutpen, *The Hamlet*, *The Town* と *The Manion* の Flem Snopes, 短篇 ‘Honor’ の Buck と Howard の honor に対する態度の相違を考察し、

さらに、キリストも釈迦も弟子たちが honor にこだわらないようにと戒めていること、*Light in August* の Lena Glove が honor を超越している有様を述べた。また、日本人の恥辱感についても考察した。

Faulkner’s Method of Presentation and Japanese Tanka Poetry (長野県短大紀要20号, 昭和41.2) フォークナーの小説の構造は首尾一貫していないで、整合性に欠けると言われている。私は、一見ばらばらと思われる各篇をまとめて精読すれば、一貫した筋がなくても、作者の伝えようとする心象は与えられると考える。短歌の連作も一首一首が独立していながら、全体を通読すれば、まとまった心象が得られる。例証として、山本友一氏の「境涯」という連作、松村英一氏の「山歩き」という連作を英訳して提示した。

‘Ruralism’ in William Faulkner (長野県短大紀要21号, 昭和42.2) フォークナーに魅せられ、難解に怯むことなく、その作品と次々に取り組んだのは、彼の宿命観と女性観に引きつけられたばかりでなく、彼の「田舎風」に同感を覚えたからである。フォークナーの性癖は農民的であるという批評があるが、北部の都会的商業主義の南部社会への侵入を怒る一面、農村の慣習に愛着を感じ、都市的なものに疑惑をいだき、自然の風景に囲繞されることを喜び、方言を使うことに満足し、地域の人々の境遇に共感を持つ。田舎者と嘲られ、鈍感を笑われても、都会人の浅薄小利口に反撥し、自分たちの重厚質朴に誇りを持つ。ミシシッピ州の社会と私の育った北信州の田舎には何と共通点が多いことだろうか。しかし、信州の片隅にも時代の波が押し寄せて来て、淳朴な習俗が乏しくなったように、Yoknapatawpha novels はフォークナーの書きのこした鎮魂曲かもしれない。

本州大学、本州女子短大 昭和四十一年三月、長野県短大を定年退職し、四月開校したこの大学に就任した。全国的に蔓延していた学園闘争の波に巻き込まれた上に、この大学独自の紛争の種があって、平穏な日常でなく、読書研究はできなかつた。女子短大併設の準備が始められ、要員を集

める責任を負わされた。翌四十二年開校ができたが、相互に知らない者が集まって来て、カリキュラムやら時間割やらを一部屋の中で慌しく決めた有様が目に浮かぶ。本州大学教授のまま、本州女子短大学監を兼任することになった。そしてあとの半年ほどは学長代行を兼任した。いろいろの問題があったが、教員はみな大人で、うまく善処してくれたので感謝している。創立してから3年目に兼任を解かれた。

Lady Nijo's Own Story 「とはずがたり」 昭和四十四年四月に兼任を解かれてから何年かは授業だけで校務は与えられなかった。これより先、ホワイトハウス先生夫妻は英国に帰住していたが、奥さんが急逝された。それで、お互いに恍惚の人にならないようにと、「とはずがたり」の英訳を始めた。航空便で原稿を交換して修正し合った。この原本は昭和十五年に山岸徳平氏によって宮内庁書陵部で発見されたもので、全くの孤本であり、鎌倉時代の後深草天皇に仕えた二条という女房の手記である。ロンドンの郵便ストが50日も続いて、英国行きの郵便の受付がなくて困惑した。昭和四十九年、東京とアメリカのラトランド市の Tuttle 商会から刊行された。

この頃、*The Tale of the Lady Ochikubo* の国際版がロンドンの Peter Owen 社から、アメリカ版がニューヨークの Doubleday 社から出た。

次に前東大教授羽柴正市氏の書評を引用する。昭和五十年三月号の「英語青年」誌からである。

◆ *Lady Nijo's Own Story* tr. by W. Whitehouse & E. Yanagisawa.

「問はず語り」の英訳を一気に読み通し、その話の面白さと訳文の明快さに感服したので、学生たちにも一読するように勧め、その一節をディクテーションに用いたりした。その後、書評を依頼されたので、岩波文庫の原本を買って見て驚いた。校閲者の解説が各章の初めにありはするが、日本文学から遠ざかっている私には、よく解らない表現が次々に出てくる。一章を英訳と対照するために、私は辞林だけでなく、大日本国語辞典までひいてようやく読みこなす始末だった。このむつかしい原文をよくも解りやすく、美しい英文に訳したものだ、訳者たちの熱意と努力に改めて敬意

を表した。

この訳文は原作に非常に忠実であるが、単なる直訳ではない。欧米の読者を常に念頭において、遠い日本の昔の事情が理解できるように、随所に親切な説明的な語句を、目立たせず、自然に、織り込んでいる。たとえば、14歳で後深草院の側室となった作者が、父親（大納言雅忠）の病勢悪化をきいて馳けつけるくんだりなど、原文では「いそぎ行くと思へども、みちのはるけさ、あづまちなどを、わけん心ちするに」とあるが、その後半を英訳では “I seemed to be pushing my way through the dense undergrowth of some wilderness in the eastern province.” とわかり易く解説すると同時に、父の臨終に何としても間に合いたいという作者の気持のもどかしさを募らせるようにしている。また女性の「七つがさね」の服装なども、その紋様が眼に浮ぶように巧みに訳されている。また取り交される恋歌は、五七五調を生かして、英訳も5行の31音節になっている。このように原作の内容と雰囲気をも忠実に再現しながら、700年前の日本の宮廷の赤裸な人間関係を、そこに漂う無常感とともに、美しい英語の物語とした訳者たちに感謝したい。異色ある日本文学作品がまた一つ世界に紹介されたことは実に喜ばしい。

(Charles E. Tuttle Co. 発行、新書版395頁、1,500円)
——羽柴 正市

日本古典文学翻訳あれこれ 昭和五十年六月に求められて信濃毎日夕刊文化欄のために書いた小文を次に載せる。

難はふくみある表現

日本古典文学翻訳あれこれ

英国人ホワイトハウス氏に協力して「落窪物語」と「とはずがたり」を英訳したのだが、「とはずがたり」を Confession (告白) と訳そうとして、とんでもないと言われた。罪を告白する懺悔録と誤解されるからであった。ところが、作者は後深草上皇に愛された上席女房で、太政大臣の家系を誇り、皇弟たちや関白兼平とも関係を結び、当代一の政治家西園寺実兼を愛人としていたのだが、罪の意識は弱く、むしろ恋慕の的だったことを自負している、つまり confession という語を使うべき個性でも状況でもないというのであった。

英米人が何を連想するか、これは日本人にはなかなか気がつかない。法皇を monk-emperor とするように和英辞典には出ているが、ヨーロッパ中世の僧院で厳しい修業をする修道士と退位してからもぜいたくな宮殿生活を続けた法皇とは大いに違う。武士を knight と訳すと、騎士道華やかな頃の婦人の護衛者が連想されて、北面の武士のイメージを妨げる。Saint Nichiren と言えば、キリストに殉じた聖者のように響き、High Priest Nichiren のほうが選ばれる。「おやおや」に Good gracious!、「さらば」に Good-bye! や Adieu! を使うと、それらがキリスト教の God につながっているために、昔の日本を述べるには適当でない。

三月は March ではなく、the third month とするのは旧暦だからで、二十歳を twenty years old としないで、in his twentieth year とする、満年齢ではないからである。ホトトギスには困ってしまった。和英辞典には cuckoo となっているが、カッコウとは全く違い、その鳴き声はとうてい song とは言えない。どうも、英米には見られないらしく、英語には通用名がないようである。

ホワイトハウス氏は私に直訳を要求し、「…言えばおろかなり」を It is beyond description とか It goes without saying とか、型通りの慣用語を使わないほうがよいと言った。「おいおい泣く」を sobbed 'oi-oi' としたり、「ふつふつと切りて」を breaking with a'futsu futsu' と訳して、原文の感じを大切にしたい。しかし、これにも限度があり、「いみじき御門(みかど)」を August Gate とまでは踏みきれず、His Majesty で妥協した。

ホワイトハウス氏が酒宴を drinks party と訳したので、この語は辞書にないかと尋ねてやったら、これでなくては親しい人々が気安く酒を汲みかわすことにならない、という返事だった。あとになって、出版社から drinking party ではいけないか、という問い合わせがあり、私は経緯を話して、ホワイトハウス氏がひどく執着しているようだから、直接ただしてほしいと答えた。ところが、幾月かたってから、編集部の全員が drinks party には反対で、これは日本の学生の日本式英語と考える危険があるから、drinking party に直すから諒解してくれと言って来た。しばらくしてから、ホワイトハウス氏が新聞の切り抜きを送ってよこし

た。それには drinks party が使っており、drinking party と言えば、酒の飲み競べの感じがする、と書き添えてあった。それを出版社に送ってやったら、陳謝して来て、米国では cocktail party を使うが、十三世紀の日本には当てはまらない、編集部は全員米国人だから誤解してしまった、しかしいちばん売れるのは米国のはずだから、drinking party を使ったことはひどいマイナスでもあるまい、と書いてあった。この一語の扱いについて、そのような航空便の往復があったのである。

しかし、なんと言っても、最大の難関は、日本古典の文体を英語に移すことである。原文を読んで、その直後に訳文を見ると、いかにも冗長で理屈っぽく感じられる。原文には主語がほとんどなく、人称代名詞もないのに、訳文のほうはそれらが省略されない。古典作家のねらいは、あいまいでふくみのある表現であって、明瞭な文体は余韻の乏しさから、みしろ恥ずべきものと考えられたのだろう。「ゆゆし」は広辞苑によれば、忌みはばかれる、恐れ多い、不吉である、いとわしい、そら恐ろしい、甚だしい、すばらしい、勇ましい、という多くの意味があった。このうちのどれが当てはまるかを判断し決定することは、いちおう必要ではあるが、その一つの意味だけを訳して間に合わせてはなるまい。原作者は幾つかの意味の複雑な絡み合いを楽しんでいたのかもしれない。

「世のつねの筋は」とせっかくあいまいに語っているのを、端的に「肉関係は」と直して訳しては台なしだとは思いつつ、単純な英語にしてしまう味気なさ。「浮き名」の中に、はかなく浮かぶ、憂いつらい、の二つの意味を掛けていることはわかって、適切な英語の表現が捜せない。現代英文学の中にも、ヘンリ・ジェームズとかウィリアム・フォークナーとか、意図的にあいまいな文体を創作している難解な作家があるが、彼らの非凡な文才をもって初めて日本古典の翻訳が成功するかもしれないとも考えた。

とにかく、古典に理解のある英米人が仕上げをしなければ翻訳は成立しない、英語のリズムが私たちにとって身につけていないからである。

また、英訳を試みてみて、初めて日本古典の文体がいかに優れているかを知ったと言ったら、わかっていただけるだろうか。

英訳平家物語書評 求められて、「英語青年」誌上に書評が出た、昭和五十年十二月号で、私の翻訳観などが加えてあるので載せる。

◆ *The Tale of the Heike*, translated by Bruce T. Tsuchida & Hiroshi Kitagawa.

平家物語は長大作であり、公家・武家の風俗、年中行事、官職、神仏の信仰、中国の故事などの事項が多くて、これを理解し、適切な英語に訳すことは大変な苦労だったと思われる。訳者が多年にわたって、多くの人々の援助を得て、辛抱づよい努力を続けられたことは容易に察することができる。原作には多くの異本があり、成立に種々の問題があるにしても、一言一句をも疎かにせずに訳され、さらに外国人のために綿密な解説と注釈が加えてある。訳者のこの完璧を期する姿勢に対し深甚なる敬意を表したい。また豪華無比の装釘も注目に値しよう。

原作に忠実ということが骨折損となる場合は稀でなく、そのために、原作の趣旨・精神を生かせばよいという名目を掲げて、外国大衆の理解を規準にして、簡略自由な訳が行われ、また鷗外のように、己れの批評眼に照らして添削し、完膚なきまでに直したりする。古典の翻訳では、原作と原作者への尊敬こそ根底であると私は考えるので、原作には飽くまで忠実という訳者の態度は、誠に好ましく思う。

しかし反面、鷗外の「一字一字に訳して、それを排列したからと云って」翻訳にはならないという見解は正しいと思う。でき上がったものが、英米人の審美の耳を満足させるだけの、英語固有のリズムがあり、文章としての Unity, Coherence, Emphasis, Suspense などへの考慮が具現していなければならない。そのためには、英米人が補訂するだけでなく、一人の英米人——日本文学・日本文化に理解共感を持ち、文章が巧みに作れる人——が全篇を書き直すべきで、さもなければ、一貫した文体は得られない。琵琶法師によって朗読されて得た原文の流麗さを思えばなおさらである。また、原文を読まない英米人の添削は見当ちがいのことがあり、必ずしも信頼できるものではない。

疑問を感じた箇所を若干を挙げる。「ふないくさ

は様ある物ぞ」を *Let me show you how to fight a sea battle!* (p. 656) と訳すと、猛将能登守教経が店員のように卑屈丁寧な男となり、「馬のかしらをたてならべ」を *rode neck and neck* と訳すと、競馬のせりあいのようであり、*draw a bead on his well-guarded target* は銃の照星のことで、弓の時代には当てはまらない。「心ある人嘆きかなしませといふ事なし」を *Those who understood beauty lamented* (p. 138) と訳すと、原文の整った音調が失われ、また「心ある」は *understand beauty* で十分だろうか。「いのりこし我たつ袖の引かへて人なきみねになりやはてなむ」の訳に、*Saint Dengyō Daishi/Who prayed for God's helping hand* とあるが、*Saint* は不当であり、最澄が祈ったにしても、「主なる神」の *helping hand* ではないだろう。(東京大学出版会発行、xli + 782 + xxv 頁、12,000円) — 柳沢 英蔵

【国民文学】「樹海」 短歌の制作は昭和二年から五年にかけて「国民文学」の普通会员として窪田空穂先生に師事した。英語の勉強に忙しくなって退会したが、昭和三十五年に塚田青紀氏の勧めで再加入をした。昭和四十一年一月同人に加えられ、第二欄に入った。昭和五十六年一月から自選七首が第一欄に載るようになった。「樹海」には、昭和五十五年に加入したのだが、計らずも選者のように扱われることとなり、年に何回も山梨県に出かけるようになった。昭和五十四年春、生存者叙勲で勲三等を授けられたが、それを記念して、自選自序、編集校正配送一切を自分でやって、歌集「あまつばめ」を刊行した。「茶の集ひけふ楽しみて行く妻の梅雨の晴間の生絹(すずし)の単衣」「家の前行く人ありて踏む雪のきしみが聞ゆけふも真冬日」「イギリスの古典に懐く愛惜は罪の如しも妻知らざれば」などがある。

長野大学産業社会学部 本州大学再建の企画が実を結んで、長野大学と改称し、内容をあらためたのは昭和四十九年四月からであった。関戸学部長の下で入試委員長やら雑多な校務に従った。昭和五十四年には付属図書館長、昭和五十八年には長野大学長職務代理となり、さらに学校法人長野学園理事長職務代理を兼ねることになり、ますま

す読書から離れてしまった。一方今更ではあるが、組織とか運営とかについて目を開かせられて、一匹狼の読書人としての生涯を反省しないではいら

れなかった。しかし、関係者の努力によって、校運が隆昌に向っているのは喜ばしい。